

授 業 概 要

授業のタイトル（科目名） 社会の理解	授業の種類 講義	必修・選択 必修
授業の回数 30回	配当学年・時期 2学年通年	時間数（単位数） 60時間（4単位）
授業担当者 松尾明奈	実務経験 ○	実務内容 福祉施設にて社会福祉士として勤務歴あり。

※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。

[授業の目的]

個人が自立した生活を営むということを理解するため、①個人と家族・地域・社会との関係性、②自助・互助・共助・公助のそれぞれの役割、③我が国の社会保障の基本的な考え方④社会保障の歴史と変遷・しくみについて学ぶ。

[授業の概要]

人間の生活が社会や様々な制度との関係性を持ちながら営まれていること、また、介護保険制度・障害者自立支援制度・介護に関連する諸制度の創設背景や、その目的について理解する。その上で、これらの制度が実際にどのように活用されているのかについて具体例を用いながら学ぶ。

[授業終了時の達成課題（到達目標）]

人間の生活と社会の関わりや、我が国における社会保障の基本的な考え方、歴史、しくみ、また、関連する諸制度について理解し、必要に応じて介護福祉士として対応するための力を身につけることができる。

[各回のテーマ・内容・方法]

回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	2	オリエンテーション	授業概要と達成課題の説明
2	2	生活と福祉①	イギリス・ドイツ・北欧・アメリカの社会福祉の歩み
3	2	生活と福祉②	日本の社会福祉の歩み
4	2	生活と福祉③	社会保障と社会福祉事業 措置制度と利用契約制度 応能負担と応益負担
5	2	生活と福祉④	明治・大正・昭和初期の主な出来事 家制度 戦前の介護観
6	2	生活と福祉⑤	第2次世界大戦後の主な出来事 家制度の崩壊 高度経済成長期における福祉
7	2	生活と福祉⑥	福祉関係八法の改正 社会福祉法の制定 施設サービスから在宅サービス中心へ
8	2	社会保障制度①	日本の社会保障体系 社会保障の目的および機能
9	2	社会保障制度②	医療保険の概要 医療提供体制 医療費の現状と医療制度改革

10	2	社会保障制度③	年金保険の概要・給付内容 財政方式 年金制度の現状と年金制度改革
11	2	社会保障制度④	介護保険の概要 介護保険制度の現状と課題
12	2	社会保障制度⑤	雇用保険の概要 労災保険の概要 雇用保険・労災保険の現状と課題
13	2	社会保障制度⑥	生存権（日本国憲法） 生活保護法（旧から新へ）
14	2	社会保障制度⑦	生活保護の原理・原則 生活保護制度の概要
15	2	生活と福祉⑦ 試験	経済・社会の動向と社会福祉 社会福祉・社会保障の将来展望 制度システムの再構築・是正と改革、筆記試験
16	2	介護保険制度①	介護保険のあらまし 介護予防サービスの新設 地域密着型サービスの導入苦情解決体制
17	2	介護保険制度②	第1号被保険者と第2号被保険者 保険料の額と徴収方法、認定申請からサービス利用 制度の運営主体、都道府県と国の支援体制
18	2	介護保険制度③	サービスの種類 居宅・施設・地域密着型
19	2	介護保険制度④	訪問調査 主治医の意見書 1次判定・2次判定 介護認定審査会費用、負担の割合
20	2	介護保険制度⑤	介護サービス計画の作成 介護支援専門員の役割 介護予防の必要性
21	2	障害者総合支援制度①	欧米・日本の障害者福祉の発達と思想的基盤 ノーマライゼーション 自立生活運動 障害の3つのレベル 国際生活機能分類 障害者基本法
22	2	障害者総合支援制度②	身体障害者福祉法 知的障害者福祉法 精神保健福祉法 援護の機関 自立支援医療 障害の予防・早期発見・早期療育 在宅・施設サービスの概要
23	2	障害者総合支援制度③	保健・医療・教育 健康審査制度 医療給付制度 障害児教育の現状 今後の障害児教育
24	2	障害者総合支援制度④	雇用・就労・所得保障 障害者雇用率 福祉的就労 職業リハビリテーション 障害年金 社会手当 移動・交通対策と建築物の整備 バリアフリー

25	2	障害者総合支援制度⑤	支援費制度から自立支援制度 総合支援制度へ 障害者総合支援法の概要 新障害者プラン
26	2	障害者総合支援制度⑥	サービス体系 障害者ケアマネジメント
27	2	介護実践に関連する諸制度①	日常生活自立支援事業 成年後見制度 事例検討
28	2	介護実践に関連する諸制度②	個人情報保護法 消費者保護制度 事例検討
29	2	介護実践に関連する諸制度③	児童虐待防止法 高齢者虐待防止法 事例検討
30	2	まとめ	まとめ 試験
〔使用テキスト・参考文献〕			〔単位認定の方法及び基準〕
【使用テキスト】 中央法規 最新 介護福祉士養成講座 2巻「社会の理解」			【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする （筆記試験40%、提出物40%、授業態度20%）

授 業 概 要

授業のタイトル（科目名） 総合福祉Ⅱ	授業の種類 講義演習	必修・選択 選択必修
授業の回数 15回	配当学年・時期 2学年前期	時間数（単位数） 30時間（2単位）
授業担当者 植村直美	実務経験 ○	実務内容 大学病院等の医療現場にて看護師として勤務歴あり。

※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。

[授業の目的]

わが国は世界でも類を見ない速さで超高齢社会に突入している。高齢者の多くは、住み慣れた自宅で最後を迎えたいと考えているが、そのためには居住環境や生活環境の整備が重要である。医療・福祉・建築について総合的な知識を身に付けている福祉住環境コーディネーターとして、利用者とその家族の潜在的なニーズをくみ取るために必要な知識を学ぶ。

[授業の概要]

1. 福祉住環境コーディネーターの役割と機能を理解し、検定試験合格を目指す。
2. 福祉住環境整備の共通基本技術を学ぶ。

[授業終了時の達成課題（到達目標）]

1. 高齢者・障害者を取り巻く社会状況と住環境について理解できる。
2. 障害別にみた福祉住環境整備の共通基本技術がわかる。
3. 福祉住環境整備の実践に必要な基礎知識が習得できる。
4. 相談援助の実践的な進め方がわかる。
5. 生活行為別にみた福祉用具の活用法が理解できる。

[各回のテーマ・内容・方法]

回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	2	高齢者を取り巻く社会状況と住環境	高齢者を取り巻く社会状況と住環境
2	2	障害者を取り巻く社会状況と住環境	障害者を取り巻く社会状況と住環境
3	2	障害のとらえ方と自立支援のあり方	障害のとらえ方、高齢者及び障害者の心身の特性
4	2	疾患別・障害別にみた福祉住環境整備の考え方①	高齢者に多い疾患別にみた福祉住環境整備
5	2	疾患別・障害別にみた福祉住環境整備の考え方②	障害別にみた福祉住環境整備
6	2	福祉住環境整備の進め方	福祉住環境整備とケアマネジメント
7	2	福祉住環境整備の基本技術①	福祉住環境整備の共通基本技術
8	2	福祉住環境整備の基本技術②	生活行為別福祉住環境整備の手法
9	2	福祉住環境整備の基本技術③	福祉住環境整備の実践に必要な基礎知識
10	2	福祉住環境整備の実践に必要な基礎知識	生活行為別に見た福祉用具の活用

11	2	実践的な福祉住環境整備①	実践に伴う知識の理解
12	2	実践的な福祉住環境整備②	
13	2	まとめ①	まとめ
14	2	まとめ②	
15	2	まとめ③	
〔使用テキスト・参考文献〕 【使用テキスト】 東京商工会議所出版 「福祉住環境コーディネーター2級公式テキスト」 日本能率協会マネジメント出版 「福祉住環境コーディネーター2級 過去&模擬問題集」			〔単位認定の方法及び基準〕 【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする。 (筆記試験50%、小テスト20%、 提出物20%、授業態度10%)

授 業 概 要

授業のタイトル（科目名） スポーツ福祉Ⅱ	授業の種類 講義・演習	必修・選択 選択必修
授業の回数 15回	配当学年・時期 2学年前期	時間数（単位数） 30時間（2単位）
授業担当者 平井公仁加 西川聖子	実務経験 ○	実務内容 平井) スポーツクラブ等にて中高老年期への運動指導の実務経験あり。 西川) スポーツクラブ・健康教室にて中高年期への運動指導の実務経験あり。

※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。

[授業の目的]

現代の超高齢社会において、病気をもちながらも活動的で生きがいに満ちた自己実現できる新しい高齢者像が求められている。そういった高齢者像を実現するため、また超高齢社会の緊急課題である介護予防に対する社会的ニーズに対応するため、自立生活に必要不可欠である「身体機能の回復・維持・向上を主たる目的」とする運動指導の役割は大きいと考える。本授業では、その理論と実技の習得を目指すものとする。

[授業の概要]

高齢者、障害者等に対する介護予防、要介護者への重症化予防に資する運動の指導ができるようになる。

[授業終了時の達成課題（到達目標）]

1. 高齢者、障害者、要介護者等に対する自立生活に向けた運動指導の必要性が理解できる。
2. 高齢者、障害者、要介護者の特性や個性に合わせた運動指導の全体像がわかる。
3. 身体機能の維持・向上に向けた運動プログラムの構築ができる。

[各回のテーマ・内容・方法]

回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	2	介護予防運動論①	介護予防運動に関する知識 介護予防のための運動の必要性
2	2	介護予防運動論②	身体運動に係わる概念用語に関する知識 レジャー・レクリエーション・ スポーツ・体育・運動などの概念の理解
3	2	介護予防運動論③	中高老年期及び要介護者の身体特性に関する知識 脳血管疾患・心疾患及びその増悪要因となる 高血圧・糖尿病、高脂血症の理解 転倒骨折、関節疾患、衰弱による筋力低下など 運動器の障害の理解
4	2	介護予防運動論④	リハビリテーションに関する知識 リハビリテーションの定義 パーキンソン病の理解 認知機能障害の概念
5	2	医学的視点からの 介護予防運動に関する知識	医学的視点からの介護予防運動に関する知識 高齢者の病気の特徴 老年症候群定義 高齢者に多く見られる疾患
6	2	理学療法的視点からみる 介護予防運動論	理学療法学視点からの介護予防運動に関する知識 高齢者の運動機能の特徴 介護予防のための運動効果 安全な運動のための留意点

7	2	救急救護に関する知識と実際①	高齢者に起こりやすい事故と病気
8	2	救急救護に関する知識と実際②	救急救護に必要なコミュニケーションの実際
9	2	測定評価に関する知識と実際	測定評価の目的と項目の選択 測定方法の選択と測定結果の活用
10	2	介護予防運動の実際①	筋力及び持久力の維持・向上に関する知識と実践 加齢に伴う持久力の低下と改善 高齢者に適した運動プログラムと実際 調整力及び柔軟性の維持・向上に関する知識と実践 介護予防運動としての調整力及び柔軟性とその実際 運動指導上の留意点
11	2	介護予防運動の実際②	
12	2	介護予防運動の実際③	
13	2	介護予防運動の実際④	参加者を引き付ける運動指導 プレゼンテーション 運動の日常生活化にむけた動機づけの方法
14	2	介護予防運動の実際⑤	運動指導の実施と評価 実技試験
15	2	まとめ	今までの振り返り まとめ
〔使用テキスト・参考文献〕 【使用テキスト】 講談社 「高齢者の筋力トレーニング」 日本スポーツクラブ協会 「介護予防運動スペシャリスト資格認定課題 レポート用資料」			〔単位認定の方法及び基準〕 【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする (実技試験30%、筆記試験30%、レポート30%、 授業態度10%)

授 業 概 要

授業のタイトル（科目名） 福祉カウンセリングⅡ	授業の種類 講義・演習	必修・選択 選択必修
授業の回数 15回	配当学年・時期 2学年前期	時間数（単位数） 30時間（2単位）
授業担当者 西角舞子	実務経験 ○	実務内容 教育福祉分野にてカウンセラーとして勤務歴あり。
※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。 [授業の目的] 1. 社会的認知など社会心理学の基礎を学び、かつコミュニケーションスキルを習得する演習を行うことにより、利用者や家族、チームに対するコミュニケーションスキルの向上につなげる。 2. 回想法を学び、利用者の精神安定を図るツールとし、対象者のニーズや目的に応じた具体的な実践方法が分かる。さらに、対人援助としてのカウンセリングスキルとして、回想法を活用することができる。 [授業の概要] 1. 介護サービス下での回想法のみならず地域という場面での活用について学ぶ 2. 対象者のニーズと参加の目的を大切にすることを理解する 3. 実施者の資質や倫理について学ぶ 4. 多職種との連携について学ぶ [授業終了時の達成課題（到達目標）] 1. よい聞き手となり、より深い利用者理解への視点を身につけることができる 2. 高齢者のその人らしさを大事にし、その人の意思を尊重できる、人を人として尊敬できる 3. 対人援助の実践において、準備・計画を行い地域の中で実践することができる		

[各回のテーマ・内容・方法]

回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	2	回想法の基本①	回想法の歴史・意義・種類
2	2	回想法の基本②	回想法実施者の資質と守るべき倫理
3	2	回想法の目的と対象①	個人とグループ
4	2	回想法の目的と対象②	地域と施設
5	2	回想法の目的と対象③	認知症のある高齢者と健康な高齢者
6	2	ニーズに応じた 回想法の実際と展開①	グループホームにおける回想法
7	2	ニーズに応じた 回想法の実際と展開②	デイサービスにおける回想法

8	2	ニーズに応じた 回想法の実際と展開③	さまざまなニーズに合わせた回想法
9	2	回想法の計画と準備①	テーマの決定と準備
10	2	回想法の計画と準備②	実施者の役割分担・計画準備上の留意点
11	2	回想法の実際①	実施中におけるさまざまな事態への対応
12	2	回想法の実際②	
13	2	回想法の実際③	記録について
14	2	回想法の効果と評価	回想法の評価方法
15	2	まとめ	まとめ 試験
〔使用テキスト・参考文献〕 【使用テキスト】 中央法規 「Q&Aで分かる回想法ハンドブック」 【参考文献】 NHKアーカイブス 「認知症・高齢者のために 思い出を今に活かす回想法」 テレビ回想法 「懐かしい話 DVDコレクション」 地域の社会資源 博物館、資料館、回想法貸し出しキット			〔単位認定の方法及び基準〕 【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする （筆記試験50%、授業態度50%）

授 業 概 要		
授業のタイトル（科目名） 国際理解 II	授業の種類 講義	必修・選択 必修選択
授業の回数 15回	配当学年・時期 2 学年・前期	時間数（単位数） 30時間（2単位）
授業担当者 田中 優子	実務経験 ○	実務内容 大学病院・総合病院等の医療現場にて看護師として勤務歴あり。
※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。 [授業の目的] 介護の基本、応用、文化活動への参加から対象者を理解し、国家資格介護福祉士について理解することで日本の介護を国際的な視点から国内外に向けて発信できるようになる。 [授業の概要] 日本の国家資格ライセンスについて理解し、介護福祉に適応できる語彙、知識を深める。国際社会の福祉の現状を理解し、その支援に必要な基礎的な知識を学ぶ。 [授業終了時の達成課題（到達目標）] 1. 国際的に福祉にかかわる者として、必要とされる知識、技術がわかる。 2. 国際社会で求められる社会人としての立ち居振る舞い、必要とされるコミュニケーション力が身につく。 3. 国家試験ライセンスについて理解する。試験問題の文章の読み、解釈ができる。（問題が読めて、何を 問われているかがわかる。解答は各教科の授業内容とする）		

[各回のテーマ・内容・方法]

回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	2	多様な暮らしと福祉①	多様な生活及び文化 ・世界の人口と課題 ・言語 ・宗教と暮らし ・政治と福祉の動向
2	2	多様な暮らしと福祉②	
3	2	多様な暮らしと福祉③	
4	2	多様な暮らしと福祉④	
5	2	多様な暮らしと福祉⑤	

6	2	多文化共生社会の理解①	多文化共生社会の理解 ・生活者としての様々な対象者の理解 ・様々な対象者のおかれている現状の理解 ・様々な対象者の課題の理解 ・様々な対象者の自立に向けた支援の理解
7	2	多文化共生社会の理解②	
8	2	多文化共生社会の理解③	
9	2	多文化共生社会の理解④	
10	2	多文化共生社会の理解⑤	
11	2	多文化共生社会の理解⑥	
12	2	多文化共生社会の理解⑦	
13	2	多文化共生社会の理解⑧	
14	2	まとめ①	今までの振り返り及びまとめ
15	2	まとめ②	
〔使用テキスト・参考文献〕 【使用テキスト】 まるごと日本のことばと文化 初級1 A2かつどう 三修社 【参考文献】 外国人のためのやさしく学べ 中央法規出版			〔単位認定の方法及び基準〕 【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする

授 業 概 要		
授業のタイトル（科目名） 介護の基本Ⅱ	授業の種類 講義	必修・選択 必修
授業の回数 60回	配当学年・時期 2学年通年	時間数（単位数） 120時間（8単位）
授業担当者 江頭里香 飯山るり子	実務経験 ○	実務内容 江頭)介護老人保健施設等の福祉現場にて介護福祉士として勤務歴あり。 飯山)訪問介護等の福祉現場にて介護福祉士として勤務歴あり。
※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。 [授業の目的] 利用者本位のサービスを提供する介護の専門職として関わっていくための知識を学び、利用者や家族の「生活の安全」を実現・確保するためのセーフティマネジメントのあり方、その基盤となる介護従事者の安全に関する知識を学び、生活支援技術や介護過程、介護実習に役立てられるようになる。 [授業の概要] 利用者にとって最も身近な介護従事者が多様な介護ニーズへ適切に対応する介護サービスの特徴を知る。 また、多様な介護現場で利用者の生活の安全を守るべくセーフティマネジメントを展開するための基礎的な力を培い、その実現には、介護従事者自らの健康や安全が保証されるべきであることへの認識を深め、実習、職場においても実践できるようになることを目指す。 [授業終了時の達成課題（到達目標）] 1. 介護を必要とする人は「なぜ、介護が必要なのか」をさまざまな角度から理解できる。 2. 介護サービスの特徴、チームアプローチによるサービスの提供についてイメージが図れる。 3. 安全の概念を予防・自立の点から考察し、セーフティマネジメントのあり方を理解し説明できる。 4. 緊急時対応の役割を認識し、必要な知識・技術を習得する。 5. 介護従事者の安全・健康管理を保証するための知識・技術を活用できるようになる。 6. 生活上の課題の解決のために必要なサービスや、地域の中の社会資源を理解する。 7. 介護実践における多職種の役割を学び、チームワークに参画する意義、連携方法を理解できる。		

[各回のテーマ・内容・方法]

回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	2	オリエンテーション	授業概要と達成課題の説明
2	2	介護を必要とする人の理解①	その人らしさの理解 生活史・価値観・生活感・生活習慣・ 生活様式の多様性
3	2	介護を必要とする人の理解②	
4	2	介護を必要とする人の理解③	高齢者の暮らしの理解 生活のリズム 家族関係 住まいと環境 余暇活動と生きがい
5	2	介護を必要とする人の理解④	
6	2	介護を必要とする人の理解⑤	
7	2	介護を必要とする人の理解⑥	

8	2	事故防止・安全対策①	施設内事故の特徴と対策 基本的介護の徹底 苦情解決 環境改善
9	2	感染対策①	感染防止の意義と介護 基本知識と技術 感染管理と衛生管理
10	2	感染対策②	
11	2	介護を必要とする人の理解⑦	高齢者の暮らしの理解の実際 生活ニーズとサービスの現状と課題
12	2	介護を必要とする人の理解⑧	
13	2	介護サービスの概要	ケアプラン・ケアマネジメントの流れと仕組み
14	2	介護サービス①	介護サービス計画の作成 介護サービス計画の確定 アセスメント 介護サービスの記録
15	2	介護サービス②	
16	2	介護サービス③	
17	2	介護サービス④	
18	2	介護サービス⑤	介護サービス計画作成の実際
19	2	介護サービス⑥	
20	2	介護サービス⑦	
21	2	介護サービス⑧	介護サービス提供の場の特性 施設
22	2	介護サービス⑨	
23	2	介護サービス⑩	介護サービス提供の場の特性 居宅支援
24	2	介護を必要とする人の理解⑨	障がいのある人の暮らしの理解 障がい者支援 障がいのある人の生活ニーズ 各種保険、年金、生活保護 生活を支えるサービスの現状と課題 家族の役割 地域の結びつき
25	2	介護を必要とする人の理解⑩	
26	2	介護を必要とする人の理解⑪	
27	2	介護を必要とする人の理解⑫	
28	2	介護を必要とする人の理解⑬	
29	2	介護を必要とする人の理解⑭	
30	2	介護を必要とする人の理解⑮	

31	2	まとめ	まとめ 試験
32	2	安全確保とリスクマネジメント① 医療対応時	受療援助 服薬 医療行為へのチームアプローチ
33	2	安全確保とリスクマネジメント② ヒヤリハット	ヒヤリハット事例の分析 原因と対策の実際
34	2	介護サービス⑪	障害者総合支援法に基づく障害福祉サービス 居宅系サービスの特性 訪問系サービスの提供の場とその特性 通所系サービスの提供の場とその特性 入所系サービスの提供の場とその特性
35	2	介護サービス⑫	
36	2	介護サービス⑬	
37	2	介護サービス⑭	
38	2	介護実践における連携①	障がいのある人の中で、独居で在宅生活する人 生活の要望 生活の実践
39	2	介護実践における連携②	
40	2	介護実践における連携③	多職種連携 介護実践するための職種の理解 生活課題解決のための多職種連携の必要性 介護福祉士の気づきと連携の実際 具体的な事例 他職種より期待される連携のあり方 他職種より期待される介護福祉士の役割
41	2	介護実践における連携④	
42	2	介護実践における連携⑤	
43	2	介護実践における連携⑥	
44	2	介護実践における連携⑦	
45	2	介護を必要とする人の理解⑯	介護を必要とする人の生活環境の理解 家族・地域・社会
46	2	介護を必要とする人の理解⑰	
47	2	介護における安全の確保①	安全の概念 生活の継続 セーフティマネジメントの過程と評価
48	2	介護における安全の確保②	転倒や転落防止 骨折予防 観察と多面的予測・分析
49	2	事故防止・安全対策②	在宅での事故の特徴と対策 生活の安全 消費者被害 緊急連絡システム

50	2	介護従事者の安全① 心の健康管理	ストレス
51	2	介護従事者の安全② 心の健康管理	燃え尽き症候群 スーパージョン
52	2	介護従事者の安全③ 腰痛予防の対策	ボディメカニクスや新たな倫理の応用 福祉用具 環境改善
53	2	介護従事者の安全④ 感染防止の対策と労働安全	感染予防 生体リズム リラックス 関係法規
54	2	安全確保とリスクマネジメント③ 緊急時対応	緊急・事故時対応 救急対応の実際
55	2	介護実践における連携⑧	生活の場 地域連携の意義と目的 利用者の生活する場・周辺の インフォーマルサービスの機能と連携
56	2	介護実践における連携⑨	
57	2	介護における安全の確保③	正確な技術・予測・分析による 利用者に合った生活支援技術の工夫
58	2	介護実践における連携⑩	在宅重視 地域包括支援センターとの連携 市町村・都道府県の機能と役割 地域の中での連携の重要性
59	2	介護実践における連携⑪	地域包括支援センター 具体的な活動
60	2	まとめ	まとめ 試験
〔使用テキスト・参考文献〕 【使用テキスト】 中央法規 最新 介護福祉士養成講座 3巻「介護の基本Ⅰ」 4巻「介護の基本Ⅱ」			〔単位認定の方法及び基準〕 【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする （筆記試験60%、レポート30%、授業態度10%）

授 業 概 要

授業のタイトル（科目名） 生活支援技術（生活）		授業の種類 演習	必修・選択 必修
授業の回数 30回		配当学年・時期 2学年通年	時間数（単位数） 60時間（4単位）
授業担当者 助川泉 江頭里香	実務経験 ○	実務内容 助川)介護老人福祉施設等の福祉現場にて介護福祉士として勤務歴あり。 江頭)介護老人保健施設等の福祉現場にて介護福祉士として勤務歴あり。	
※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。			
[授業の目的] 生活を支援するということは、利用者及びその家族等の人としての尊厳や生活リズムに代表される ノーマライゼーションの要件の実現、自立や自己決定に基づく生活マネジメント、生活の基本スタイルか らQOLの達成など、生活福祉と生活経営（マネジメント）を支援することにつながることを理解する。			
[授業の概要] ひとつひとつの生活活動がその人らしい生活を形作り、特段の意識をせずに行なっている。 このような生活サイクルを構築していくことは利用者やその家族の生活をメリハリのあるものとし、 人としての尊厳を保持していくことに繋がることを学習する。又、居住環境における具体的な生活 支援の過程で、居住環境へのニーズへの支援と他職種との連携協働の方法を学ぶ。			
[授業終了時の達成課題（到達目標）] 1. 「生活」「生活形成のプロセス」「生活経営（マネジメント）」「生活支援の考え方」を 理解し説明することが出来る。 2. 居住環境の生活の流れの中で生活を理解できる。 3. 自立に向けた居住環境の形成に向けて、具体的な事例をもとに他職種との連携の あり方を示すことができる。			

[各回のテーマ・内容・方法]

回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	2	オリエンテーション	授業概要と達成課題の説明
2	2	生活の理解	生活の定義 生活の全体像 施設での生活
3	2	生活上の価値観と目標の関係	生活の豊かさ 生活者の理解 自立と健康
4	2	生活の性質・要件・分類	生活者（人） 空間（場所） ツール（道具）
5	2	生活上の環境・資源・領域	生活環境 生活資源 生活領域
6	2	生活の構造	生活構造 機能と構造 生活の広がり
7	2	ライフを見つめる	日本人のライフサイクル ライフスタイルの類型
8	2	施設等での集住の場合の工夫①	ユニットケア

9	2	施設等での集住の場合の工夫②	居室の個室化・なじみの生活空間づくり
10	2	安全で心地よい生活の場づくり①	安全で住み心地の良い生活の場づくりの工夫
11	2	安全で心地よい生活の場づくり②	居宅改修と住宅のバリアフリー化
12	2	安全で心地よい生活の場づくり③	ユニバーサルデザイン
13	2	安全で心地よい生活の場づくり④	快適な室内環境の確保 浴室・トイレ・台所等の空間構成
14	2	安全で心地よい生活の場づくり⑤	プライバシーの確保と交流の促進・安全性への配慮
15	2	まとめ	今までの振り返り 試験
16	2	根拠に基づく生活支援①	価値「人間の尊厳」に基づく生活支援
17	2	根拠に基づく生活支援②	ICFの概要
18	2	根拠に基づく生活支援③	ICFに基づく生活支援
19	2	根拠に基づく生活支援④	環境因子への関わり方の理解
20	2	居住環境のアセスメント	ICFの視点から利用者の全体像をアセスメントし 適切な住居環境について考える
21	2	より深みのある生活支援の探求	法律並びに生活研究に基づく生活支援
22	2	自立に向けた居住環境の整備①	生活支援技術全体からの居住環境整備の重要性
23	2	自立に向けた居住環境の整備②	快適な環境へのイメージ
24	2	自立に向けた居住環境の整備③	日本の住まいや住まい方と気候風土との関係
25	2	生活空間と介護①	居場所とアイデンティティー
26	2	生活空間と介護②	住み慣れた地域での生活の保障
27	2	生活の機能	生活上の人と物の相互作用 家庭経営 家庭管理
28	2	生活の潤い（余暇）	余暇とレジャー 余暇生活支援
29	2	他職種との連携	自立に向けた居住環境の工夫・留意点
30	2	まとめ	演習によるまとめ 試験

〔使用テキスト・参考文献〕 【使用テキスト】 中央法規 最新 介護福祉士養成講座 6巻「生活支援技術Ⅰ」 7巻「生活支援技術Ⅱ」 8巻「生活支援技術Ⅲ」	〔単位認定の方法及び基準〕 【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする。 (筆記試験30%、実技試験50%、授業態度20%)
---	--

授 業 概 要

授業のタイトル（科目名） 生活支援技術（家事・終末期）		授業の種類 演習	必修・選択 必修
授業の回数 2 3 回		配当学年・時期 2 学年通年	時間数（単位数） 6 0 時間（4 単位）
授業担当者 松永佳子 西川聖子	実務経験 ○	実務内容 松永) 大学病院・総合病院等の医療現場にて看護師として勤務歴あり。 西川) 総合病院・クリニック等の医療現場にて看護師として勤務歴あり。	

※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。

〔授業の目的〕

自立に向けた家事の介護

さまざまな「家事」の援助技術を提供していく上での基本行動の理解と知識、家事の介助に関する技術を基礎から学び、現場で自ら考えて実践に活用できる能力や、利用者の個別性に対応できるための能力を取得する。

終末期の介護

終末期の介護について、介護福祉士の役割を果たせる力量をつけるために、理念、知識、技術を習得し、個々の利用者特有の終末期の状況アセスメント、ケアプラン、実践へとつながる力を身につける。

〔授業の概要〕

自立に向けた家事の介護

日常生活の中にある「家事」という行為は、私たちすべての日常の中に存在する。介護福祉士は利用者の必要に応じた各種の家事援助技術（スキル&テクニック）を習得しておく必要がある。「自立に向けた家事の介助」では、介助を必要とする人の生活を重視し、個別性を尊重し、幅広い生活上の援助を行うための基礎となる技術を幅広く取得していくことを目指す。

終末期の介護

日常に死は存在しているが、「死」を自分のこととしてとらえにくい現実がある。まず「喪失体験を分かち合う」というテーマで、個々の感受性を掘り起こし共有することで「死」について考えることを意識させる。そして利用者が、ひとつしかない人生最後の飛躍を試みている終末期の意義を考え合い、死生観を鍛える。また終末期の理解に立ち、QOLを高める身体・生活援助やコミュニケーション技術を身につける。チームアプローチの中で介護福祉士の役割を自覚し、援助と連携できる力を養う。

〔授業終了時の達成課題（到達目標）〕

自立に向けた家事の介護

1. 家事の介助の意義及び目的を理解し、自分の言葉で表現できる。
2. 家事の介助を必要とする人の状態を把握し、適切な家事の介助のための技術を選択することができる。
3. 家事の介助を必要とする人に、適切な家事の介助を提供できる技術を習得する。

終末期の介護

1. 延命治療、緩和ケア、尊厳の保持とは何かを学び自分自身の死生観を深めることができる。
2. 終末期の心身状況を理解、QOLを高める身体・生活援助と共感、呼応する対話ができる。
3. 在宅・施設ターミナルケアでの他職種の連携、臨終時の介護技術、介護福祉士の役割を理解する。

[各回のテーマ・内容・方法]

回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	3	オリエンテーション 家事の意義と目的	授業概要と達成課題の説明 自立に向けた家事の介護の意義と目的
2	3	家事の技法①	調理技術の取得
3	3	家事の技法②	
4	3	家事の技法③	
5	3	家事の技法④	裁縫技術の取得
6	3	家事の技法⑤	
7	3	家事の技法⑥	洗濯・掃除・衣類・寝具などの衛生管理
8	3	家事の技法⑦	
9	3	家事の技法⑧	買い物、家庭経営・家計の管理
10	3	家事の技法⑨	防災 家庭管理 防災時の対策
11	3	家事に参加することを支える介護①	ICFの視点から利用者の全体像をアセスメントし、 適切な家事に関する介助について考える
12	3	家事に参加することを支える介護②	家事への参加とその意欲・支える介護の工夫
13	3	利用者の状態・状況に応じた 介助の留意点①	運動機能が低下している人の介助の留意点
14	3	利用者の状態・状況に応じた 介助の留意点②	感覚機能が低下している人の介助の留意点
15	3	利用者の状態・状況に応じた 介助の留意点③	認知機能が低下している人の介助の留意点
16	2	他の職種の役割と協働	チームアプローチによる家事介助の方法
17	2	終末期の介護①	喪失体験
18	2	終末期の介護②	死生観
19	2	終末期の介護③	現在の終末期医療（延命と緩和ケア）
20	2	終末期の介護④	終末期のQOL
21	2	終末期の介護⑤	終末期の家族の心理 看取り時の介護福祉士の役割と臨終時の対応技術

22	2	終末期の介護⑥	他職種との連携によるターミナルケア
23	1	まとめ	よりよい終末期の支援 試験
〔使用テキスト・参考文献〕 【使用テキスト】 中央法規 最新 介護福祉士養成講座 6巻「生活支援技術Ⅰ」 7巻「生活支援技術Ⅱ」 8巻「生活支援技術Ⅲ」			〔単位認定の方法及び基準〕 【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする (筆記試験50%、実技試験20%、 提出物20%、授業態度10%)

授 業 概 要

授業のタイトル（科目名） 介護過程各論Ⅱ	授業の種類 演習	必修・選択 必修
授業の回数 22回	配当学年・時期 2 学年通年	時間数（単位数） 60時間（4単位）
授業担当者 助川 泉 松永 佳子	実務経験 ○	実務内容 助川) 介護老人福祉施設等の福祉現場にて介護福祉士として勤務歴あり。 松永) 大学病院・総合病院等の医療現場にて看護師として勤務歴あり。
※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。 [授業の目的] 介護実習で経験した介護過程の実践的展開の場面を振り返り、介護の実践課程を構成する要素についての理解を深めることが出来る。同時に、介護とは何か、よりよい介護を提供するとはどういうことなのか、自己の介護観の形成へとつながることが出来る。 [授業の概要] 介護過程は個々の介護ニーズを的確に把握し、計画的に介護を実践・評価していく科学的な問題解決法であることを理解する。利用者の生活の質の向上に向けて、生活上の課題を把握し、それを解決していくために必要な介護のあり方を個別に考察し計画を立て、実践・評価していく一連の流れを理解する。また、利用者の多様なニーズに答えるため、他職種との連携も求められている。介護過程を学ぶ最終段階として、模擬カンファレンスを通して協働的問題解決を中心に介護実習との相互性を活かし実践的思考とスキルの習得を目指す。その中で専門職としての理念の構築を目指す。 [授業終了時の達成課題（到達目標）] 1. 介護サービス利用者が生活する環境を考慮し、その時その場で最善の支援ができるよう、持てる知識と技術を柔軟にかつ最大に活用した介護過程を展開できる。 2. アセスメントの意義を理解し、何故その項目が必要なのか説明することができる。また、利用者の状態を的確に把握し、ニーズを大切に介護計画を立案・実施することができる。 3. 介護過程の展開における評価の重要性を理解し、その評価が妥当なものであるかどうかの判断、また、他者への計画への正当な評価ができるようになる。 4. チームアプローチの必要性を認識し、専門職の一員として他職種との連携を行うことが出来る。		

[各回のテーマ・内容・方法]

回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	3	介護過程の実践的展開Ⅰ①	実習ⅡBに向けて介護過程の振り返り 一年次の実習ⅡAの振り返り
2	3	介護過程の実践的展開Ⅰ②	
3	3	介護過程の実践的展開Ⅰ③	
4	3	介護過程の実践的展開Ⅰ④	
5	3	介護過程の実践的展開Ⅰ⑤	

6	3	介護過程の実践的展開Ⅱ①	実習ⅡBで受け持った事例について振り返り、介護過程の実践的展開についての学びを深める。 実践した介護過程は、利用者の状態・ニーズに合ったものであったか、実際に行った介護過程の展開事例についてお互い持ち寄り、模擬カンファレンスを通して評価を受ける・評価されるという両方の立場を経験する。 介護過程は常に流動するものであり、支援者として 場面や環境の変化に柔軟に対応したケアの提供が求められていることを理解する。
7	3	介護過程の実践的展開Ⅱ②	
8	3	介護過程の実践的展開Ⅱ③	
9	3	介護過程の実践的展開Ⅱ④	
10	3	介護過程の実践的展開のまとめ①	実際に行った介護過程を客観的に見つめなおし、事例研究として文章にまとめることで、個別ケア及び自立支援のためには、専門職としての思考過程つまり「介護過程」が不可欠であることを理解していく。また、今後の介護観への形成につながるようにまとめる。
11	3	介護過程の実践的展開のまとめ②	
12	3	介護過程の実践的展開のまとめ③	
13	3	介護過程の実践的展開のまとめ④	
14	3	介護過程の実践的展開のまとめ⑤	
15	3	介護過程の実践的展開のまとめ⑥	
16	2	在宅における介護過程①	在宅における介護過程は、本人はもちろん家族への支援も不可欠なものとなる。在宅での介護過程の展開について事例を通して実際に展開することで理解を深めていく。 ・居宅サービス計画書の作成 ・個別援助計画の作成
17	2	在宅における介護過程②	
18	2	在宅における介護過程③	
19	2	在宅における介護過程④	
20	2	在宅における介護過程⑤	
21	2	在宅における介護過程⑥	
22	3	まとめ	介護過程の展開において 専門職として守るべき倫理・道徳 職業人として期待される姿勢

〔使用テキスト・参考文献〕 【使用テキスト】 中央法規 最新 介護福祉士養成講座 9巻「介護過程」	〔単位認定の方法及び基準〕 【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする (提出物90%、授業態度10%)
--	---

授 業 概 要			
授業のタイトル（科目名） 介護総合演習Ⅱ		授業の種類 演習	必修・選択 必修
授業の回数 2 3回		配当学年・時期 2 学年通年	時間数（単位数） 6 0時間（4 単位）
授業担当者 飯山 り子 植村 直美	実務経験 ○	実務内容 飯山）訪問介護等の福祉現場にて介護福祉士として勤務歴あり。 植村）大学病院等の医療現場にて看護師として勤務歴あり。	
※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。			
[授業の目的] 介護総合演習Ⅰで学んだ統合するための手段・方法を実践し、知識、技術の向上を目指す統合能力を養う。また、実習目標に沿った効果的な学習ができる。			
[授業の概要] 介護総合演習Ⅰで学んだ統合するための手段や方法を学内実習、介護現場での実習と段階を追って実践し、社会に求められる介護福祉士の役割と自立支援に向けた多職種協働の意義と役割を実習を通じて理解できるようになる。			
[授業終了時の達成課題（到達目標）]			
1．利用者理解に必要な基本的コミュニケーション方法やマナーを実際の行動としてとることができる。 2．実習施設の概要と利用者の生活ニーズを整理・理解でき、介護福祉士に求められる倫理性と専門性を明確化できる。 3．介護実習の振り返りや他者とのディスカッションを通じて自己を客観的に振り返り、次に向けた課題を明確化できる。 4．個別ケアや多様なサービス形態のあり方、その中での多職種の連携が理解できる。 5．自己の介護観を明らかにして、自立支援に向けた介護を実践するためには将来にわたって知識・技術の向上を目指すことの必要性がわかる。			
[各回のテーマ・内容・方法]			
回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	3	事前指導	実習オリエンテーション 介護実習Ⅱ B 実習目標・記録用紙配布および内容確認 実習心得・注意点について確認
2	3	個人票・計画書の書き方	個人票・計画表の作成 介護実習Ⅱ B
3	3	学びを深めるための記録とは①	介護実習Ⅱ Aで記入した1日の実習記録をもとに講義・演習、学びを深める記録の書き方についての理解を深める。
4	3	学びを深めるための記録とは②	
5	3	介護保険と各種サービス	介護保険のサービスと利用者の生活像について、1年次で学んだ内容を再整理させ理解を深める。
6	3	帰校日	個別指導 収集した情報の整理・活用 生活上の課題・計画立案
7	3	事後指導	介護実習Ⅱ Bの振り返り
8	3	事前指導	実習オリエンテーション 介護実習Ⅰ B 実習目標・記録用紙配布および内容確認 実習心得・注意点について確認

9	3	介護活動の場の理解 地域密着型サービス 居宅サービス	グループホーム・ケアハウス・小規模多機能・ 訪問介護など さまざまな施設の理解と多職種連携
10	3	帰校日	個別指導 実習施設の理解 多職種の連携の実際
11	3	事後指導	介護実習 I B の振り返り
12	3	介護活動の場の理解①	今までの実習施設を振り返り 介護倫理 介護福祉士に求められるもの
13	3	介護活動の場の理解②	礼節とマナー コミュニケーションの実際
14	3	介護活動の場の理解③	各専門職の役割・業務の理解
15	3	実習報告会①	報告会とは 目的・目標 報告会企画と運営
16	2	実習報告会②	報告会準備 報告会の企画・運営・役割分担 各実習施設ごとに介護技術の工夫についてまとめ 報告会資料作成・発表練習
17	2	実習報告会③	
18	2	実習報告会④	
19	2	実習報告会⑤	
20	2	実習報告会⑥	報告会開催
21	2	実習報告会⑦	
22	2	実習報告会⑧	実習報告会の振り返り
23	1	まとめ	試験とまとめ
〔使用テキスト・参考文献〕 【使用テキスト】 中央法規 最新 介護福祉士養成講座 10巻「介護総合演習・実習」			〔単位認定の方法及び基準〕 【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする (筆記試験20%、提出物40%、授業態度40%)

授 業 概 要		
授業のタイトル（科目名） 介護実習 I B	授業の種類 実習	必修・選択 必修
配当学年・時期 2 学年前期	時間数（単位数） 6 0 時間（2 単位）	
授業担当者 西川聖子 助川泉・江頭里香 飯山るり子・ 植村直美・松永佳子	実務経験 ○	実務内容 西川、松永、植村) 看護師として医療現場での勤務歴あり。 助川、江頭、飯山) 介護福祉士として介護現場での勤務歴あり。
※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。 [授業の目的] 各領域において学んだ知識や技術を実践の場で統合・活用し、利用者や多職種との関わりを通して、人間の尊厳や個別ケアの重要性を学ぶとともに、具体的な介護を提供できる実践力を習得することを目的とする。 [授業の概要] 生活の場である利用者の様々な環境を理解し、利用している施設が提供している介護サービスの特徴、多職種チームによるサービス提供の実際を学習していく。 訪問介護事業所 ケアハウス 小規模多機能施設 在宅介護支援センター グループホーム 障害児入所施設 障害者支援施設 [授業終了時の達成課題（到達目標）] 1. 様々な施設の目的、地域における役割、法的位置づけが理解できる。 2. 実習に際して、社会人としてのマナーを守り、利用者・家族とのコミュニケーションを通して、人間関係の構築ができる。 3. 利用者には様々な暮らし方や日常生活があり、個々の生き方を尊重することの重要性に気付くことができる。 4. 地域社会で暮らす高齢者や障がいのある方が福祉サービスの利用に際しても、その人らしさを維持するために何が必要なのかという個別ケアの重要性が理解できる。 5. 利用者の個別ケアを実施するために、多職種協働や関係機関との連携について知ることができる。 [各回のテーマ・内容・方法] ■実習 I B 事 前：施設の法的位置づけ、概要について事前学習をしておく。 実習中：援助活動を通し、利用者とのコミュニケーションを行い、人間関係を構築する。 ：生活支援の実際に参加または観察し、利用者に関わる多職種の役割と連携を知る。 ：生活支援の実際に参加または観察し、利用者に関わる多職種の役割と連携を知る。 ：その方らしい生活を維持するための個別ケアを知る。		
[使用テキスト・参考文献] 【参考文献】 中央法規 最新 介護福祉士養成講座 10巻「介護総合演習・介護実習」		[単位認定の方法及び基準] 【認定条件】 ・出席が総時間数の5分の4以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・達成目標ごとに評価項目を決め、5点法で評価（実習指導者50%、教員50%）

授 業 概 要

授業のタイトル（科目名） 介護実習ⅡB	授業の種類 実習	必修・選択 必修
配当学年・時期 2学年前期	時間数（単位数） 150時間（5単位）	
授業担当者 西川聖子 助川泉・江頭里香 飯山るり子・植村直美	実務経験 ○	実務内容 西川、植村）看護師として医療現場での勤務経験あり。 助川、江頭、飯山）介護福祉士として介護現場での勤務経験あり。
※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。 [授業の目的] 各領域において学んだ知識や技術を実践の場で統合・活用し、利用者や多職種との関わりを通して、人間の尊厳や個別ケアの重要性を学ぶとともに、具体的な介護を提供できる実践力を習得することを目的とする。 [授業の概要] 受け持ち利用者のアセスメント、計画立案、実施、評価、修正という介護過程一連の流れを実施する。また計画や実施内容を振り返りながら、安全・安心・自立支援を目指した介護のあり方を考えると同時に、指導者や関係他職種者への報告・連絡・相談を通して、生活支援チームの一員としての介護福祉士の役割を理解する。 介護老人福祉施設 介護老人保健施設 障害児入所施設 障害者支援施設 [授業終了時の達成課題（到達目標）] - 生活歴、おかれた環境（法制度、人間関係を含む）、生活リズム、医学的観点など、様々な視点から情報を収集し、尊厳ある利用者の個性が理解できる。 - 利用者の社会参加を大きな目標とし、尊厳の保持の観点から、安全・安心・自立支援に基づいて収集した情報を分析し、生活上の課題を明確にすることができる。 - アセスメントにより出された課題に対して、指導者や他職種のアドバイスを受けながら、具体的に実践可能な介護計画（個別援助計画）をたてることができる。 - 基本技術を応用し、対象に応じた日常生活援助が提供できる。 - 実践した介護計画（個別援助計画）を利用者の反応から評価し、修正していくことができる。		

[各回のテーマ・内容・方法]

■実習ⅡB

事 前：施設の概要について説明を受け、施設の目的、地域における役割を知る。

実習中：援助活動を通し、利用者とのコミュニケーションを行い、人間関係を構築する。

- ：指導者、記録物、家族、観察を通し、様々な視点から受け持ち利用者の情報収集を行い、収集した情報から受け持ち利用者の全体像を捉える。
- ：指導を受けながら、受け持ち利用者の生活目標と生活上の課題を明らかにする。
- ：立案した介護計画（個別援助計画）は、許可を得た上で実施評価し、修正する。
- ：指導を受けながら受け持ち利用者の生活上の課題を達成するための個別援助計画を立案する。
- ：生活支援技術を実際の指導を受けながら、指導者の元で実施する。
- ：援助の実際に参加または観察しながら対象の状況における援助技術の工夫、応用を学ぶ。
- ：一日の目標に沿った介護行動の実際や、実習中に学んだことを整理・記録・評価していく過程で明日の目標を立てる。
- ：疑問に思ったことは、指導者・施設職員に積極的に質問をしながら解決をしていく。
- ：カンファレンスで目標の達成度と学び、今後の課題を整理し発表する。

[使用テキスト・参考文献]

【参考文献】
中央法規
最新 介護福祉士養成講座
10巻「介護総合演習・介護実習」

[単位認定の方法及び基準]

【認定条件】

- ・出席が総時間数の5分の4以上ある者
- ・成績評価が3以上の者

【評価基準】

- ・達成目標ごとに評価項目を決め、5点法で評価（実習指導者50%、教員50%）

授 業 概 要

授業のタイトル（科目名） 発達と老化の理解		授業の種類 講義	必修・選択 必修
授業の回数 30回		配当学年・時期 2学年通年	時間数（単位数） 60時間（4単位）
授業担当者 植村直美	実務経験 ○	実務内容 大学病院等の医療現場にて看護師として勤務歴あり。	

※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。

[授業の目的]

人が誕生し、加齢と共に成長・発達・成熟していく過程を理解する。老化による心理的面・疾患等を学び、専門職としての介護実践につなげることができる能力を養う。

[授業の概要]

誕生から高齢に至る過程において、歴史的背景・社会的背景を知り、歩んできた個々の人生の状況、今後歩んでいく個々の人生について個別化、個性化していることをとらえる。高齢者の心理や疾病と生活との関係を学びながら生活支援のあり方を探る。

[授業終了時の達成課題（到達目標）]

1. 人間の発達・老化の理解を基に介護の専門職のあり方を考えることができる。

2. 高齢者の身体的変化に伴う介護実践のあり方、また精神的変化に伴う介護実践のあり方を理解する。

3. 「老い」についての定義・考え方を身につけ、また法的・制度的視点と合わせて考えることができる。

4. 高齢者の心理を理解し、老化を受け入れる高齢者の気持ち、また介護者として介護を必要とする人の心理に呼応できるような力を養う。

5. 障害・友人との別れ、経済的不安を持つ高齢者の気持ちを理解し、介護の専門職としてのあり方を考える。

6. 高齢者の不調・また疾病について理解を深める。

7. 他職種との連携や必要性を理解し、介護実践につなげることができるようになる。

[各回のテーマ・内容・方法]

回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	2	人間の成長と発達①	発達とは 人間の発達段階と発達課題
2	2	人間の成長と発達②	発達と個人差 形態的成長 身体機能の発達
3	2	人間の成長と発達③	発達と個人差 精神運動機能の発達 心理社会的発達
4	2	老年期の発達と成熟①	老化とは 老化と老年期 老いから加齢へ 老化と老年期 老いから加齢へ 老年期の定義 WHOの定義
5	2	老年期の発達と成熟②	老年期の発達課題の留意点 老年期のセクシュアリティ 価値の転換 サクセスフルエイジング
6	2	老化に伴うこととからだの変化と日常生活①	老化に伴う心身の変化の特徴 防衛反応（反射神経）の変化 回復力（抵抗力）の変化 適応力（順応力）の変化

7	2	老化に伴うことごと からだの変化と日常生活②	老化にともなう身体機能の変化と日常生活への影響 老化にともなる外見上の変化 高齢者の免疫機能・感覚機能の変化 咀嚼機能・消化機能の変化 循環器系・呼吸器系の機能変化 運動機能の変化 泌尿生殖機能の変化 体温維持機能の変化 記憶機能・認知機能の変化
8	2	老化に伴うことごと からだの変化と日常生活③	
9	2	老化に伴うことごと からだの変化と日常生活④	
10	2	老化に伴うことごと からだの変化と日常生活⑤	
11	2	老化に伴うことごと からだの変化と日常生活⑥	
12	2	まとめ	今までのまとめ 試験
13	2	高齢者と健康①	高齢者の症状・疾患の特徴 健康の定義（WHO） 高齢者の健康とは 高齢者の症状の現れ方の特徴
14	2	高齢者と健康②	高齢者に多い症状・訴えとその留意点 痛み 腹痛・胸痛 骨・筋肉・関節の痛み かゆみ 不眠 めまい しびれ むくみ 咳 痰 息苦しさ 息切れ 誤嚥 便秘 下痢 食欲不振 体重減少 出血
15	2	高齢者と健康③	
16	2	高齢者と健康④	
17	2	高齢者と健康⑤	

18	2	高齢者と健康⑥	高齢者に多い病気とその留意点 生活習慣病 脳血管障害 脳梗塞 くも膜下出血 脳出血 がん 心疾患 高血圧 糖尿病 高脂血症 腎臓病 肝臓病 痛風 骨・関節系の病気 骨粗鬆症 変形性脊椎症 変形性関節症 関節リウマチ 歯・口腔・目・耳の病気 う蝕 歯周病 白内障 緑内障 加齢性難聴 皮膚の病気 皮膚掻痒症 疥癬 白癬 カンジダ 湿疹 腎・泌尿器の病気 前立腺肥大症 尿失禁 脳・神経系疾患 認知症 パーキンソン病 消化器系疾患 胃・十二指腸潰瘍 大腸疾患 食道炎 循環器系疾患 心不全、虚血性心疾患 呼吸器系の病気 肺炎 誤嚥性肺炎 慢性呼吸不全 COPD 気管支喘息 精神疾患 統合失調症 老人性うつ病 神経症
19	2	高齢者と健康⑦	
20	2	高齢者と健康⑧	
21	2	高齢者と健康⑨	
22	2	高齢者と健康⑩	
23	2	高齢者と健康⑪	
24	2	高齢者と健康⑫	
25	2	高齢者と健康⑬	
26	2	保健医療職との連携	
27	2	老化に伴うことと からだの変化と日常生活⑦	老化に伴うことの変化と日常生活への影響 高齢者が「老い」を受け止める心理 社会・家庭での役割を失う喪失感 障害があることに対する心理 配偶者・知人・友人との別れを受け止める心理 生活者としての経済的不安を感じる高齢者の心理 老いの価値観 受容 要介護による高齢者の心理
28	2	老化に伴うことと からだの変化と日常生活⑧	
29	2	老化に伴うことと からだの変化と日常生活⑨	
30	2	まとめ	今までのまとめ 試験

〔使用テキスト・参考文献〕 【使用テキスト】 中央法規 最新 介護福祉士養成講座 「発達と老化の理解」 【参考文献】 中央法規 「症状からみる老いと病気とからだ」	〔単位認定の方法及び基準〕 【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする (筆記試験90%、授業態度10%)
--	--

授 業 概 要

授業のタイトル（科目名） 障害の理解	授業の種類 講義	必修・選択 必修
授業の回数 30回	配当学年・時期 2学年通年	時間数（単位数） 60時間（4単位）
授業担当者 西川聖子 飯山るり子 京極新治	実務経験 ○	実務内容 西川) 総合病院・クリニック等の医療現場にて看護師として勤務歴あり。 飯山) 訪問介護等の福祉現場にて介護福祉士として勤務歴あり。 京極) 在宅医療現場にて医師として勤務している。

※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。

[授業の目的]

1. 障害の概念・理念を理解する。
2. 障害とは何かを理解し、介護の専門職に必要な、さまざまな知識を理解する。

[授業の概要]

障害の概念や基礎理念を学び、介護支援につなげて思考できるようにする。医学的側面から見た障害に対する基礎的知識を学び、また連携や協働の必要性や家族の支援についても理解を深める。

[授業終了時の達成課題（到達目標）]

1. 障害の概念や基本理念を、介護の専門職として支援につなげることができる。
2. 障害の基礎的理解をもとに、障害のある人に対する生活支援について考えることができる。

[各回のテーマ・内容・方法]

回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	2	オリエンテーション 障害の基礎的理解① 障害の概念	授業の概要・進め方 障害の理解を学ぶ意義 障害についてのとらえ方 ICIDHとICFの考え方
2	2	障害の基礎的理解② 障がい者福祉の基本理念	ノーマライゼーションの理念 リハビリテーションから見た理念 国際障害者年からみた理念 障害が及ぼす心理的影響と自己概念 障害の受容、障害への適応と適応機制
3	2	内部障害のある人の理解①	心臓機能障害のある人の理解 虚血性心疾患（狭心症、心筋梗塞） 心不全 大動脈疾患（大動脈瘤、大動脈解離） 静脈瘤 末梢動脈疾患（閉塞性動脈硬化症） *原因 症状 治療法 検査（EKG 心エコー 血液検査） 腎臓機能障害のある人の理解 急性・慢性腎不全 代償・非代償腎不全 尿毒症 透析（シャント形成）腹膜透析 呼吸機能障害のある人の理解 COPD 喘息 肺結核 筋萎縮性側索硬化症 筋ジストロフィー *治療 酸素療法 薬物療法 気管切開 人工呼吸療法 膀胱・直腸機能障害のある人の理解 膀胱・直腸がん 潰瘍性大腸炎 （コロストミー イレオストミー ウロストミー） 小腸の機能障害のある人の理解
4	2	内部障害のある人の理解②	
5	2	内部障害のある人の理解③	
6	2	内部障害のある人の理解④	

7	2	内部障害のある人の理解⑤	ヒト免疫不全ウィルスによる 免疫機能障害のある人の理解 HIV AIDS
8	2	内部障害のある人の理解⑥	肝機能障害のある人の理解 B・C型肝炎 肝性脳症 肝不全 低アルブミン血症 高ビリルビン血症 食道静脈瘤
9	2	視覚障害のある人の理解	視覚障害のある人の理解 視覚障害の基礎知識及び心理状態
10	2	聴覚障害・言語障害のある人の理解	聴覚・言語障害のある人の理解 聴覚障害及び言語障害の基礎知識 心理状態
11	2	まとめ	まとめ 試験
12	2	重複障害のある人の理解	重複障害のある人の理解 重症心身障害 盲・ろう
13	2	肢体不自由のある人の理解①	肢体不自由（運動機能障害）のある人の医学的理解 運動機能障害 脳梗塞 脊柱拘縮 脳性麻痺 脳出血 脊髄損傷 中枢神経損傷 筋ジストロフィー 中枢神経障害（二分脊椎、筋委縮性側索硬化症） 肢体不自由（運動機能障害）のある人の生活 心理的理解 生活の理解 介護上の留意点
14	2	肢体不自由のある人の理解②	
15	2	まとめ	まとめ 試験
16	2	知的障害のある人の理解①	知的障害のある人の理解 脳性麻痺 代謝異常 中毒 内分泌疾患 ダウン症候群 てんかん 知的障害のある人の生活 心理的理解 生活の理解 介護上の留意点
17	2	知的障害のある人の理解②	
18	2	発達障害のある人の理解	発達障害のある人の理解 医学的理解 心理的理解 生活の理解 介護上の留意点
19	2	精神障害のある人の理解	精神障害のある人の生活 医学的理解 心理的理解 生活の理解 介護上の留意点
20	2	高次脳機能のある人の理解	高次脳機能のある人の生活 医学的理解 心理的理解 生活の理解 介護上の留意点

21	2	難病のある人の理解	難病のある人の生活 医学的理解 心理的理解 生活の理解 介護上の留意点
22	2	障害のある人に対する介護の基本的視点①	障害のある人に対する介護の基本的視点 自己決定 ケアワークの中のエンパワメント 権利擁護
23	2	障害のある人に対する介護の基本的視点②	社会資源の利用と開発 福祉用具と自立 居宅支援と自立 社会活動と自立
24	2	在宅での生活を支える連携と協働① 地域のサポート体制 チームアプローチ	保健・医療・福祉・教育・労働サービスへの連携 他の福祉職種との連携 保健医療職種との連携 地域におけるサポート体制 行政・関係機関との連携 地域自立支援協議会との連携 インフォーマル支援ネットワーク
25	2	在宅での生活を支える連携と協働② 地域のサポート体制 チームアプローチ	
26	2	在宅での生活を支える連携と協働③ 地域のサポート体制 チームアプローチ	
27	2	家族への支援①	家族の障がい受容の過程 家族の介護力の評価と援助 家族の置かれている環境の理解 家族へのサポート 家族へのレスパイトケア
28	2	家族への支援②	
29	2	家族への支援③	
30	2	まとめ	まとめ 試験
〔使用テキスト・参考文献〕 【使用テキスト】 中央法規 最新介護福祉士養成講座 「障害の理解」			〔単位認定の方法及び基準〕 【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする (筆記試験90%、授業態度10%)

授 業 概 要

授業のタイトル（科目名） 家庭経営学	授業の種類 講義	必修・選択 選択
授業の回数 8回	配当学年・時期 2 学年後期	時間数（単位数） 1 5 時間（1 単位）
授業担当者 松永 佳子	実務経験 ○	実務内容 大学病院・総合病院等の医療現場にて看護師として勤務歴あり。
※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。		
[授業の目的] 施設のみではなく、住み慣れた住まいでの在宅介護を視野にいれ、人間生活の基礎である「家族・家庭経営・管理」を科学的に理解し、介護援助の充実をはかる。 [授業の概要] 家庭経営を科学的に理解し、家庭を構成する家族形態に合った健康維持の知識と技術を身に付けることが出来る。 [授業終了時の達成課題（到達目標）] 介護の現場において、科学的な視点から対象に応じた家事援助を考えることが出来る。		

[各回のテーマ・内容・方法]			
回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	2	家庭生活と消費者保護①	授業の内容と進め方について 消費者問題 消費者問題の歴史 様々な消費者問題（悪質商法、振り込め詐欺等） 救済措置（クーリングオフ等）
2	2	家庭生活と消費者保護②	多重債務問題（その変遷） その予防と解決方法 （任意整理 特定調停 個人再生 自己破産 など） 国民生活センター・消費生活センター
3	2	家庭生活と消費者保護③	利息の計算 利息制限法・出資法 クレジットカードの仕組みとその危険性 家庭の収入と支出・生活設計を立てる
4	2	家庭生活と家族	家庭生活と家族 家庭の意義 家族の重要性 家族の形態 核家族と拡大家族・世帯 2種類の家族と独立青年期
5	2	家族の法律 婚姻と婚姻の解消	憲法24条とベアテロシタ 婚姻に関わる法律（婚姻が認められるための要件 婚姻の効果 内縁） 親族の範囲と親等の数え方 婚姻の解消 離婚に関する法律（離婚の種類 裁判離婚理由など） 子供と離婚（親権 養育費 面接交渉など）
6	2	家族の法律 親子関係・相続	嫡出子と非嫡出子 相続に関する法律 （相続順位 法定相続分 寄与分制度 遺留分 遺言など）
7	2	家事労働・高齢社会・環境	家事労働（内容と特徴 合理化 家電製品の今昔） 高齢社会 （平均寿命と平均余命 平均の意味 老化とは） 環境（災害・地震などと備え） ロボット
8	1	まとめ	今までの振り返り 試験
[使用テキスト・参考文献] 【参考文献】 中央法規 最新 介護福祉士養成講座 2巻「社会の理解」 6巻「生活支援技術Ⅰ」			[単位認定の方法及び基準] 【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする （筆記試験80%、授業態度20%）

授 業 概 要

授業のタイトル（科目名） 経済学		授業の種類 講義	必修・選択 選択
授業の回数 1 5 回		配当学年・時期 2 学年後期	時間数（単位数） 1 5 時間（1 単位）
授業担当者 橋口真理子	実務経験	実務内容	
※原則、この科目は対面授業形式にて実施する。			
[授業の目的] 世界で今、何が起きているかを考察し、現代国際社会の動きに関心を抱かせること、さらに、世界で生じている様々な問題と日本がどのように関わっているのかを理解し、社会を見つめる感性や現代を生きる人間としての生き方について考える力を養う。			
[授業の概要] 現在の国際社会において特に関心が寄せられている項目を取り上げ、講義する。			
[授業終了時の達成課題（到達目標）] 国際社会で生じている問題についての理解を深め、その問題についての解決策について自分の考えを持ち、表現できるようにする。			

[各回のテーマ・内容・方法]

回	時間数	テーマ・主題	内容の概要
1	1	オリエンテーション 国際事情を学ぶ意義	授業の内容と進め方 世界情勢に対する意識を持つことの必要性
2	1	世界の中の日本① 国際社会と日本	世界の中の日本 時事問題(新聞記事などから)
3	1	世界の中の日本② 日本の現状を知る 1	国会予算から見る日本の現状 社会保障
4	1	世界の中の日本③ 日本の現状を知る 2	国会予算から見る日本の現状 国債費
5	1	国際事情① 人口問題から見えるもの 1	世界の人口問題と日本 世界人口の推移と今後の展望 人口爆発の原因と影響
6	1	国際事情② 人口問題から見えるもの 2	日本における少子高齢化の現状
7	1	国際事情③ 豊かさから見えるもの	「豊かさとは」格差社会と世界
8	1	国際事情④ 食糧事情から見えるもの 1	食料自給率 世界と日本の比較 自給率向上の方策
9	1	国際事情⑤ 食糧事情から見えるもの 2	食糧高騰の問題 食糧問題の今後の課題
10	1	国際事情⑥ 環境問題から見えるもの 1	世界の環境問題 地球温暖化と環境問題
11	1	国際事情⑦ 環境問題から見えるもの 2	環境先進国の環境問題 環境問題と今後の課題
12	1	国際事情⑧ 雇用問題から見えるもの 1	日本における正規雇用と非正規雇用の問題

13	1	国際事情⑨ 雇用問題から見えるもの2	日本における外国人雇用の現状と課題
14	1	グループ演習	国際事情に関する新聞記事などをもとに 検討・発表する (グループ討論など)
15	1	まとめ 試験	今までの振り返り 試験
〔使用テキスト・参考文献〕 【参考文献】 厚生労働白書 新聞			〔単位認定の方法及び基準〕 【認定条件】 ・出席が総時間数の3分の2以上ある者 ・成績評価が3以上の者 【評価基準】 ・試験及びレポート等により5点法とする。 (筆記試験30%、レポート50%、授業態度20%)